

7 章 米、くる病、密売買 (Rice, Rickets and Rackets)

中心部から離れた港から近代的な列車に乗って大日本帝国の首都に到着した外国人は、赤い帽子を被ったポーターに迎えられ、時代遅れではあるが西洋風の駅を通過して、路上に荷物が置かれる。タクシーを待っているうちに、タクシーは時代遅れの乗り物であることに気づく。足が骨折したり、死にそうになったりしたら、警察の特別な手配で車が呼ばれ、病院まで運んでもらえるかもしれないが、ホテルに行くだけなら難しい。対処方法はいくつかある。時間をつぶすために、英語圏の人々との戦争にもかかわらず英語で発行され続けている半官半民の *ジャパン・タイムズ・アンド・アドバタイザー* を買って、新聞を読み終わる前に木炭で走るフォード車が駅を通り過ぎるのを期待しながら待ち続けることになるかもしれない。運よくタクシーが見つかったとしても、その幸運が長くは続かず、タクシーに近づくことはまずないだろう。なぜなら、タクシーは日本人の群衆に囲まれているからだ。困っている外国人を助け、独特な英語を使おうと熱心な黒い学生服を着た若い男子学生が、人力車を提案するかもしれない。しかし、かつては人力車を使っていたのは芸者だけだったので、その台数が限られており、需要が高まっていることを考えると、人力車を見つけるのはタクシーと同じくらい難しい。訪問者はついに、駅から歩いて 15 分ほどの帝国ホテルまで歩けばよいことに気づく。学生は急いでいなければ、たいていは喜んで外国人に道を案内し、荷物を運ぶのを手伝ってくれる。

低層のレンガ造りの雑然としたホテルは、外国人客のための印象的な居留としてアメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトに設計させたものだが、そのホテルに着いた客は運悪くお湯が出ない時間帯に到着してしまうかもしれない。しかし、配給時間まで待てば、食堂に入る前に風呂に入ることができる。食事の公的価格は決まっており、上限が昼食は 40 セント、夕食は 1 ドル 25 セントまでになっている。食事はなかなかおいしく、平均的な食欲には十分だが、メニューにある黒い液体のコーヒーは、これまで出会ったこともないブレンドになっている。もっとおいしいのは、毎日午後 5 時以降に販売される新鮮な醸造ビールだ。一人 1 本だけで、売り切れるので、夜の 8 時頃までに購入する必要がある。訪問者は、特に 1941 年に日本に到着した場合は、その年に政府が公式訪問としてのアメリカ人を招待する政策を放棄しており、すぐに状況に気が付き始める。綿のシャツ、ウールのスーツやコート、革靴、絹のストッキング、かつては入手できた輸入品などがなくなっている。外国人居留者は、パン、砂糖、小麦粉、バター、牛乳、卵、肉、野菜、石炭、その他、慣れ親しんだ 101 以上の必需品の入手が困難になっていると不満を訴えた。

こうして、何人かの外国旅行者は日本での生活状況について極めて悲観的な風評を持ちながら自国に帰って行った。しかし、彼らは日本の居住者は外国人とは違い、ホテルには住ま

ず、絹のストッキングや革靴を履いたり、タクシーに乗ったりすることはないことに気づいていなかった。何人かの外国居住者が持っている、耐えきれない状況から、日本人も生活が限界に到達しつつあるだろうという考えはあまり正しくない。日本人が外国からの衣服を着て、ステーキやリブ付きチョップ、パン、バター、アメリカのジャズ、映画を好むようになったのは、比較的、最近である。すべては外国製で外国から輸入され、生来の封建文化への付属品だ。これは東京のコンクリートビルのようなものだ。外国の構造物、鉄道、自動車道路と現代の戦争兵器を製造する産業機械を得たが、外国の料理、衣類、趣味と思想は、侍の夢物語のように一夜にして消え去った。日本人はペリー提督と他の外国の旅行者によって乱される前の先祖の封建生活に戻った。

実際に、多いわけではないが、彼らの先祖の暮らし方は残っていた。中折れ帽が大衆に使われるようになったが、被っている日本人は昔からの絹の着物を着て、下駄やわらじを履いているのが普通である。革靴を履いても、殆どの日本人はひもを緩めず、下駄の様に滑らせている。このため、靴の裏が壊れるので、しばしば、金属の支持具で補強されている。このような靴は日本人にとってはせいぜい不快に感じられるだけで、彼らは靴を脱いで足が空気に当てることで、安心する。外国のネクタイ、シャツ、背広を着ている日本人はこれらの外国の衣服を脱いで、もっと心地の良い着物に着替え、畳に座って、夕食で魚のスープ、ご飯、刺身か煮魚、海藻、たくあん、いくつかの野菜とりんごかみかんを食べる。外国の朝食である卵、ベーコン、コーヒーとパンを食べたことはないかもしれないが、朝食にはご飯、味噌汁といくつかの漬物に幸福を感じるのが平均的な日本人である。昼食では多くのご飯と平豆と干し魚を食べる。これに飽きてくると、小麦粉製品であるマカロニ、ソーメン、蕎麦を注文するかもしれない。最後にお茶を飲んで、日本人は10セントの食事に満足するのだが、これはアメリカ人がローストとステーキを食べるのと同じである。牛乳、パン、バターと肉が品切れになるかもしれないが、これらは日本人の食事には必須ではない。

日本の巨大な「外国」市街地には白人の訪問者と共に多くの暮らし方や器具が入ってきた。日中戦争勃発以前には東京の街にはたくさんの自動車が走り、フォードやシボレーに乗ったタクシー運転手が歩いている客を探していた。しかし、1937年以降は、ガソリンの消費規制が次第に厳しくなった。最初は愛国的な基盤によって自動車の使用は妨げられた。警察が劇場と芸者屋の外に駐在し、車を止めた者を睨みつけ、侮辱していた。彼らは競馬場、ゴルフ場などの「お国のための努力」ではないと考えられる場所へ行くことを阻止した。午後10時以降はタクシーは道路を走ってはいけないことになった。最終的には、1941年9月に政府は兵器に使用するために、大切な液体燃料の供給を完全に中止し、素面な人々にも影響を与えた。多くの自動車は木炭自動車へと改造された。エンジンは丘で急に止まり、ぷっすん・ぷっすんと音を出して、最終的には動かなくなるのだった。日本の一般人の自動車の殆

どは軍部に転用されたが、木炭で詰まった自動車はすぐ廃車となった。政府役人を含めて、個人的にタクシーを使っていた人々が、日本の皇民の殆どが以前から使用していた路面電車や列車に乗るようになった。人力車の車夫は封建時代の先祖の時と同じように忙しくなった。先進的な考えを持つ人々の多くは人力車に自転車を繋げて、特急料金として一回7セントを取っていた。

ガソリンと石油の削減で、漁師にはモーターボートの使用が大きな魚群があるとの情報提供が出されたときのみとなり、痛手だったが、日本人の殆どにとっては深刻ではなく、深刻なのは米不足だった。政府は米が最悪の状況であることを認めたくなかったが、新聞には状況は良くないことを示す記事がいくつか掲載された。ある記事では、「石川県金沢市では、家族で米を大切に扱うようになり、米の残り物がほとんどなくなり、スズメの数が非常に少なくなっています。」また、困窮を示す以下の記事があった。「大阪府上之郷村の村民は遺族宅に葬儀で行くときは、悲しむ家庭をさらに米で困らせないために、食事を各人が持参することが常会で決められました。」日本人の日常の飲食物の食糧の減少は生産量の減少と、陸軍が中国での軍事行動に供給するために使用されるためだった。日中戦争勃発前には米の量は500,000,000 ブッシェル (1bu=36.367L) だったのが、1940年にはその供給が300,000,000を少し超える程度にまで減少し、その一方で、需要は増加した。労働者、肥料と他の農業物資の減少が政府の固定価格政策と共に、広範囲の米の生産量の減少を引き起こし、全国的な悪天気も悪影響を与えた。米不足を緩和するためにインドシナとタイからの米と混米や、大麦やマダラ・インゲンと混ぜることが試みられた。しかし、日本人にとって何らかの過失の責任があるとすれば、それは何も混ざっていない日本の白米を非常に好んでいることだ。それにも関わらず、日本人は供給される国産米 50%以下の混米を最大限に活用しなければならなかった。それでも米の供給は需要に達せず、政府は最終的に配給制に頼らざるを得なかった。この配給制によって不足はある程度軽減されたが、国からは多くの学生が呼ばれ、彼らは強制的に労働と肉体運動のために服従しなければならなかった。後者は兵役のために筋肉を鍛えるためだった。

遂行中の日中戦争と、大きな太平洋戦争への準備の二重の負担の結果、国家経済の混乱が他の生活必需品の配給制を引き起こした。1940年の冬は東京では一家族で木炭が小俵二つ、重量で約66ポンドが配給されたが、人口の四分の一には料理や暖房用のガスがなかった。小麦の割り当ては一人暮らしの人には0.5ポンドで、家族のある場合は一人当たりの割合が少なくなり、20人以上になると配給は合計で3ポンドだった。砂糖は月毎に一人当たり六分の一ポンドが配給され、同時期に各家族にマッチ小箱1箱と大箱1箱が配られた。

新鮮な野菜と魚が不足し、値段が一年で400%上昇した。8ポンドのスイカの値段が16セ

ントだったのが 60 セントに上昇し、小さなネットメロンや甘露メロンの価格が 4 ドルから 10 ドルに上昇したが、これは日本の労働者の月給である 40 円に相当した。政府は値段を固定することで抑制しようと試みたが、農民はこれに反応して、出荷を制限したり、都市以外で販売したりするようになった。視察では、ある東京の店にはトマト 1 個と 15 本のキュウリとナスしか手元にはなかった。しかし、野菜やフルーツが少ない一方で、急に、市場に鶏肉が豊富になり、人々が雌鶏を食べるようになったことで卵不足の不満が生まれた。調査で、農民は雌鶏への十分な餌が確保できず、雌鶏を売っていることが分かった。新聞では日本の資金凍結にオランダ領東インドが従ったことで、トウモロコシの輸入ができなくなったとオランダ領東インド領を責めたが、それからすぐに日本は攻撃して雄鶏の餌以上を獲得することになった。しかし、国は「鶏のためのフルーツ」と言われている物(**トウモロコシ)には気にする必要はないことを確信した。それは、凍結卵(**トウモロコシ)が以前は占領下の中国から米国に多く輸出されていたが、アメリカによる日本の資産凍結への仕返しとして、日本に送られる予定だからである。

物不足と配給制度で東京の店のうち、特にケーキとパンを取り扱っている店には長い行列が出来た。都会の住民は米に加えて、ケーキとパンが大好きになっていたのだ。米の代わりに一人に対してパンを毎日半斤の配給を得ることも出来たが、米が配給される人々も、配給制度後でパンの切符がなくても、買えることを期待して列に並んだ。東京の住民には月に約 25 セント分の菓子類の切符も配られたが、西日本の住民に配られたのは 15 セント分だけだった。太平洋戦争勃発の少し前に、政府は日本酒を統制した。米不足で日本酒の供給が急激に縮小し、労働者が購入することが困難になったからだった。そして、政府は炭鉱夫と工場労働者の「毎日の疲労緩和」と「明日の活力回復」の援助として日本酒を配給することにした。労働時間が伸び、満足な生活状況が乏しい労働者階級の過労が増大したことが、政府に彼らへの刺激剤を保証することを決定させた一因であった。

報道によると、当局は長引いている戦時状況の結果、国の健康基準の状況に関心を持っていた。政府の職員組合が六百万人に労働者の身体検査を実施し、その一方で、結核予防会は五百人の医学部学生を国内の全ての工場に送って、国の結核の感染状況を調査した。このことで分かったことは、認めざるを得ないことだが、確実に工場の若い労働者に結核患者が増えていることだった。自国の良好な生活と健康を犠牲として、十億円が戦争遂行のために消費され、日本の結核死亡率は世界一を誇り、イギリスの二倍以上、米国の三倍以上の死亡率となった。日本当局の統計によると、日中戦争勃発から二年間で日本での結核の犠牲者は 50% 以上上昇し、多くは若者の 15 歳から 23 歳だった。1938 年の結核での死亡者数は 148,872 人、同年の日本の結核患者数が推定 1,500,000 人、これに対して収容ベッド数は約 1 万しかなかった。この頃から犠牲者の急激な上昇は疑う余地もなかったが、ベッドは軍国主義者か

らの需要が増加したことで、一般市民用のベッドを増やすことはあまり出来なかった。日本当局は状況が悪化している原因を単に調査しただけで、これに対処する能力があまりにも欠けていた。人手不足が深刻な国にとって、多くの労働者に、結核の治療として必要な、十分な休暇を与え、きれいな空気と太陽を受けることを許すことは困難であった。ある日本の医師が何人かの、治癒するかどうかの危機的な結核患者に対して、暗く不衛生な工場に戻るように命じたときほど、胸を張り裂けさせられたことはなかったと言った。

物不足に苦しんだのは労働者だけではなかった。病院に勤務している看護師が子供の「くる病」が非常に増えているというレポートを報告した。この疾患では正常な骨の石灰化が阻害され、骨が軟骨で終了し、症状としては O 脚と胸の陥凹の症状が見られる。これは、日本の食事にバターと牛乳が導入されたことである程度の改善が見られていた。牛乳を確保することが極めて困難となり、乳製品が乏しくなったことで、バターの代用品としてマーガリンが長い間、使われたことで、再び、若者をくる病に罹らせることになった。

**くる病（ビタミン D と日光不足が原因）

軍隊への医師の流出で、国内の医師不足が起こり、状況は悪化した。未熟な医学生が実践に送り出された。これらの学生は工業地域や農業地帯に派遣され、午前 6 時から夕方まで働き、その後は農民を映画で楽しませた。仕事の過程で、医学生は村の学生の約 75% が寄生虫に、50% がトラコーマにかかっていることを発見した。政府の調査では、健康水準の低下と強制労働による重圧により、近視の学生数が急増していることが明らかになった。小学校の学生の 30%、中学校の学生の 50%、高等教育機関の学生の 70% が近視の被害者であることが判明した。

軍需産業での賃金上昇による好景気が物不足からの経済抑制と配給制度と結びついたことで、帝国の臣民のほとんどが違法である「闇取引」をやるようになった。違法取引が蔓延したことで、以前は法を厳密に守っていることで知られていた国民が、法を無視するようになった。かつては日本の国民は世界で最も法を順守することで知られていた。生活基準の苦難の結果、日本人はこの特質を失った。

威嚇する警察官は、日本の一般人を全て仕切り、朝から夜中、市民が眠るまで密売買の状況を監視しようとしたが、売人の増大は、政府による彼らを取り締まるための「経済警察」軍のそれを超えていた。牛飼いの仲間は乳牛を集めるだけでなく、その牛乳を水で希釈して、牛乳を切望するレストランとホテルに非現実的な値段で売ることによって助かっていた。農民は列車の通路を野菜、鶏、卵、米を満たした木箱を詰めてやって来て、政府指定の販売店に卸して安いお金を得るのではなく、東京の主婦に直接配り、主婦から多額な金を手に入れた。以

前よりも旅行が普及した。以前のリュックサックに弁当を入れて出発し、帰りには空になるのとは逆に、週末に旅行者は空のバッグを持って東京を出発し、帰りには貴重な純粹の白米をぎゅうぎゅうに詰めて戻って来た。旅行者がこの白米を自分で食べるよりも売りたいかったら、その値段の円はその重さの kg と同程度だった。商店が幸運にも、法的なルートでポツポツとやってくる野菜やフルーツが入ってくると、これを公定価格を超えた闇取引の価格で客に売った。ある警察官が、ある商店には空き箱の下には大量なキュウリ、トマト、ナスが置かれており、店の前には「品切れ」と書かれているのを見つけたと報告した。この商店には野菜が豊富だったが、それは「常連」客分だけだった。

政府がコーヒー1杯の公定価格を4銭から2.5銭に下げたことで、依存者の胃もそれに比例して小さくなった。コーヒー店は1杯4銭の時にはコーヒー1ポンドで50杯分を煎じていたのが、大量の大豆を加えることで、苦い130杯を煎じることで二倍の利益を得た。大豆コーヒーには耐えられない、男らしくない男性は多数の東京のバーに安らぎを求めた。バーのグラスにはお客に分かるように公定価格で決まっている酒の量を示す印が書かれてあり、客は十分な量が入っていることを確認することが出来た。量が少なかったことは稀だったが、質は殆ど常に悪かった。ウイスキーの風味を加えた水がハイボールとして売られ、シロップの風味の水はカクテルになった。しかし、1941年夏までは外国のウイスキーの密輸入酒が1リットルの4/5の量で12~15ドルで購入することが可能だった。ウイスキーの希釈以上に日本人を苛つかせたのは日本酒の希釈だった。気の利いた販売業者の何人かは、ホルムアルデヒドを加えて保管し悪化を予防しようとした。

配給外のほとんどの商品の価格は違法なのが普通で、合法的な価格は例外だった。ウールや綿で作られた衣類、皮革製品、タイプライター、カメラ、その他さまざまな外国産品は、公式価格の5倍から10倍の値段で取引された。これらの商品の違法取引は、1941年に闇市場から最終的に姿を消すまで続いた。

徐々に経済的、政治的に世界から孤立するにつれて、日本人は以前の封建生活に戻っていったが、輸入された新たな商品への嗜好は消えることはなかった。日本人は器用で、代替品を作ろうとしたが、多くは失敗した。爆撃機に流線型のガソリン缶を積ませて航続距離を延ばす際に見せた才能は、馬の毛から手織りの布を、ウミウシから布の繊維を作ることにも応用された。短繊維は衣類において綿やウールの代用品としてよく使われた。しかし、短繊維のシャツを洗濯屋に出した後に私が知ったことだが、短繊維は常に持ち主に忠実であるわけではない。日本の洗濯屋はシャツが二度と戻らず、最後には水に溶けたことを認めた。どうやら他の人も既に同じ経験をしたようで、何かもっと良いものを求めて、紙だけでできている国民服が作られたが、それは短繊維よりも安価で良好とされた。スーツが大量生産で十分

安くなれば、それが汚れた後にはナプキンのように捨てることが出来た。

洋食では薩摩芋が絞られ、焙じて、最終的にはじゃが芋のような匂いがしないことを保証して、コーヒーとして包装され、その一方で、ゆり根が一時期米国に輸出されていたが、薩摩芋と同じように処理され、「味は元々のコーヒーと同じで、栄養満点」の飲み物として作られた。大根の葉は乾燥、粉末され、パンを作る小麦粉の代用品となった。茶葉が馬の飼料に適していることを発見し、政府が使用済み茶葉を収集するように全国的なキャンペーンを開始し、実験に熱心な農民がコウモリの糞が肥料になるかもしれないと発表し、東京農業試験場がこれは優れた代用品だと公表した。木材の供給を抑制するために、マッチの両端にリンが塗ったものが発売された。この両端にリンが塗ったマッチ 80 個が 1 セント以下で売られた。多くのアメリカ人が米国でのゴム不足の可能性に気付くよりもずっと前に、日本では鉄もゴムも使用しない木製の自動車タイヤが開発され、購入者にとっては滑らかな乗り心地だと断言した。発明家は、頁岩とイワシからガソリンと石油の代替品を作り、多くの自動車ドライバーに使用してもらおうとしたが、残念ながらうまくいかなかった。失業の運転手が一年の研究の結果、失業とガソリン不足の解決法を見出した。彼は空気圧で動かす自動車を開発した。本土の最北端の北海道で、政府は鉄の鉄道線路を木製の鉄道線路と交換することを決めた。その上を通常の石炭燃焼機関の排気筒から集められたばい煙を燃やすエンジンでけん引される列車を走らせることが出来た。

しかし、たとえこれらの経験で失敗しても、殆どの日本人はそれほど深刻だとは思わなかった。もし、新たなコーヒーが嫌いだったら、昔のお茶を飲み続ければよかったし、代用品の西洋風のスーツと靴に満足できなかったら、昔からの絹の着物と下駄を装用すればよかった。政府にとって主な問題は日本人食である米、魚、昆布、海苔と漬物を国民に供給することだった。大混乱の後、配給制度が満足できるほどうまくいき、公式に国民には「最低限の生活」が保障された。これらは、民衆が決して放棄するつもりがない、中世の基準だった。彼らはタクシー、パン、アメリカ映画無しでやって行かなければならなかったが、多くはこれらがなかった時代を思い出した。概して、彼らはごく最近に手に入れた外国からの数少ない贅沢品を、あまり不満を感じず、放棄した。物不足で不満を言うのは外国人であって、日本人ではなかった。

日本人はアメリカと同じように、生来、伝統的に自給自足の食事をしており、封鎖になっても、イギリスやドイツとは異なり、餓死することはないだろう。彼らは、戦争行為の遂行のための必須要因のなかで、食に関しては恵まれている。インドシナとタイを征服したことで、米の供給量が以前よりも増えるだろう。食べ物よりも深刻なのが労働と原材料であったが、どちらも新たな占領地域で確保できるだろう。平均的な生活が最低生活水準にまで低下し、

国民の健康状態の悪化と中国での戦争の長期化が重なり合い、その不満が、1940 年に齋藤隆夫によって爆発した。しかし、皇民に新たなユニフォームと新たなナショナリズムを提供することで、軍国主義者は彼らに、生贄の重要性を理解し、神の使命を受託した日出づる帝国の子供であることを思い出させることで、彼らの怒りを忘れる方法を教えた。